

多様な背景をもつ子どもたちに博物館の学びを届ける —小単元「江戸図屏風に隠された謎を読み解け」を事例に—

クラーク記念国際高等学校連携校

専修学校クラーク高等学院姫路校 八田 友和

1 実施学年及び教科・領域

専修学校 第2学年 発展地歴（特設単元）

※ 専修学校科目「発展地歴」は、高等学校「日本史 B」の学習指導要領に準拠した目標・授業内容で年間指導計画を作成しています。

※ 現在は「専修学校クラーク高等学院姫路校」に勤務していますが、今回報告する実践は前任校「専修学校クラーク高等学院芦屋校」で行ったものです。

<高等学校と専修学校の併修システム>

今回、授業実践を行った専修学校クラーク高等学院芦屋校は、連携校「クラーク記念国際高等学校」との併修システムを採用している。これにより、専修学校に在籍しながら、高等学校の面接指導や報告課題、定期試験を受けることができる。そのため、専修学校の「一般的な学び」や「専門的な学び」を受けつつ、高等学校での進級・卒業に向けた学習も同時並行で可能となる。

そのため本実践を受講した生徒は、専修学校クラーク高等学院芦屋校の生徒であると同時に、クラーク記念国際高等学校の生徒ともいえる（生徒も両校の学生証をもっています）。

2 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 単元名「江戸図屏風に隠された謎を読み解け」

(2) ねらい

① 学習指導要領との関連

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説—地理歴史編—』（以下、『指導要領—地理歴史編—』）日本史探究の「(3) 近世の国家・社会の展望と画期（歴史の解釈、説明、論述）」において、「(ア) 法や制度による支配秩序の形成と身分制、貿易の統制と対外関係、技術の向上と開発の進展、学問・文化の発展などを基に、幕藩体制の確立、近世の社会と文化の特色を理解すること」¹⁾とある。（下線筆者加筆）

そこで本研究では、下線を踏まえた授業を展開する際、江戸図屏風を教材として取り上げる。江戸図屏風が作られた背景や描写に込められた意味を読み解き、幕藩体制の確立・時代の特色の理解を目指した。

② 単元の目標

- ・屏風や各種資料から、幕藩体制の確立や江戸幕府の対外関係について理解しようとしている。
- ・屏風や各種資料に描かれた朝鮮通信使の様子を観察し、当時の江戸幕府の対外関係について理解することができる。

- ・江戸図屏風が作成された背景や、果たした役割を類推することを通して、江戸時代初期の社会のしくみを理解することができる。
- ・江戸図屏風を通して、「屏風の読み解き方」や「情報の読み取り方」を理解することができる。

(3) 博物館との関連

① 活用方法：非来館型活用

② 活用資料

○国立歴史民俗博物館公式サイト内「WEB ギャラリー」

- ・江戸図屏風左隻（高精細画像）
- ・江戸図屏風右隻（高精細画像）
- ・江戸図屏風（高精細画像順次拡大版）
- ・江戸図屏風を A0 サイズに印刷したもの
- ・江戸図屏風を A3 サイズに印刷したもの

○長篠合戦図屏風（大坂城天守閣のミュージアムショップにて購入した屏風（複製）を使用）

(4) 本実践で活用した資料について

本実践で活用した江戸図屏風および資料解説は次の通りである。

【資料1】 実践で用いた江戸図屏風（右隻）



(出典) 国立歴史民俗博物館ホームページ

右隻（資料1）の景観は、水戸徳川家の下屋敷（後樂園）・加賀前田家の下屋敷・神田明神・湯島天神・不忍池・上野の東照宮・寛永寺と大仏・観音堂・浅草寺・王子・谷中・板橋・三好之天神・川越城・鴻巣などの、広範な地域が対象になっている。²⁾ 加えて、徳川家光が主宰した、三宮司の鹿狩・洲渡谷の猪狩・鴻巣の鷹狩・川越の川狩などが、それぞれ大きく描かれている。³⁾

【資料2】 実践で用いた江戸図屏風（左隻）



(出典) 国立歴史民俗博物館ホームページ

左隻（資料2）の景観は、江戸城と堀割でほぼ画面の半分を占めている。江戸城本丸に描かれた何重もの城門や武家屋敷は、幕府権威を空間的に表現しているといえる。加えて、詳細は後述するが江戸城に登城している朝鮮通信使の様子が描かれており、江戸幕府の対外関係についても読み取ることが可能である。江戸城下には、日本橋・中橋・京橋・新橋といった品川への東海道筋の町屋が展開している様子が描かれている。⁴⁾ 加えて、徳川家光の事績として、目黒の追鳥狩・檜物屋の鞭打・向井将監の船揃いなどが画面を彩っている。⁵⁾

（5）生徒観

筆者の前任校である専修学校クラーク高等学院芦屋校には、小・中学校在籍時に不登校を経験した生徒が多く在籍している。そのため、①基礎学力が定着していない生徒が一定数存在する点、②多様な背景をもつ生徒たちが在籍している点、③「聞く力」「読む力」が弱い生徒も一定数存在する点、の3点を踏まえた授業実践を構想する必要がある。

そのため、今回の授業実践においても、①高等学校レベルの学習をする前に中学校レベルの復習を行う点、②授業の進行ペースを工夫する点、③グループで助け合っって屏風の読み解きなどを行う点、④五感に訴える授業を行う点の4点に留意した授業実践を行った。

（6）指導観

『図説 江戸図屏風をよむ』において、江戸図屏風は「徳川將軍家のお膝元の武都江戸の町並、すなわち江戸城天守と日本橋などの建築途上の江戸城下を、俯瞰図法を用いて象徴的に描いた金箔地に極彩色の絢爛豪華な屏風絵である」⁶⁾と説明されている。屏風は右隻と左隻の2枚で構成されており、江戸城の城郭、紅葉山東照宮、朝鮮通信使の登城の様子など江戸幕府の威信に加えて、三代將軍の徳川家光の事績を主なモチーフにしている（屏風に描かれているものの詳細な説明は、「(4) 本実践で活用した資料について」で整理している）。なお、本研究における江戸図屏風は、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風（歴博本）」を指している。

本実践では、「江戸図屏風」とともに、朝鮮通信使に関する資料も多く取り上げる。具体的には、江戸城の近くに描かれている朝鮮通信使に着目することで、朝鮮通信使が屏風に描かれた理由や通信使が果たした役割について学習を行う。徳川政権の外交政策のなかで、朝鮮は琉球とともに、「通信の国」と位置付けられており、正式な外交関係のあった国家だったといえる。そのため、「朝鮮通信使に対する応接は、徳川政権が国際社会において自己の立場を明確に表現することのできる貴重な舞台であり、政権の威信を内外に印象づける重要な機会であった」と考えることができる。⁷⁾

加えて、朝鮮通信使は江戸で過ごしたのち、江戸幕府の要請を受け日光を訪れている。日光には、言わずと知れた日光東照宮があり、江戸幕府初代将軍の徳川家康が東照大権現として祀られている。その神格化された家康が祀られている日光に通信使が訪れることで、国内外に対して江戸幕府の「御威光」を示そうとしていることがわかる。また、東照宮には、朝鮮からの種々の献上品に加えて、回転式のオランダ灯籠や琉球王国が献じた中国製の花瓶など、国際色豊かな献上品が多くある。ここからも、江戸幕府の粗廟を外国からの献上品で飾ることによって、政権の威信を内外に誇示する有力な手段として用いたことが読み取れる。⁸⁾ そのため、「朝鮮通信使・江戸幕府・日光東照宮」などのキーワードをもとに、外交政策についても学習したいと考えている。

3 指導計画（全4時間）

(1) 長篠合戦図屏風を活用した事前学習（1時間）

過程	時数	○学習活用及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
事前学習	1	<p>○長篠合戦図屏風を事例に、屏風に描かれているものを読み取る練習をする。 「長篠合戦図屏風」</p> <p>○屏風をつくる（依頼する）際に、誰かの思惑が反映されていることを確認する。</p> <p>○屏風から情報を読み取って、織田・徳川連合軍が勝利した理由と、武田軍が負けた理由を読み取ろう。</p>	<p>■主体的に学習に取り組む態度</p> <p>■思考・判断・表現</p> <p>■知識・技能</p>

(2) 江戸幕府について事前学習（1時間）

過程	時数	○学習活用及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
事前学習	1	<p>○家康や秀忠、家光が行った政策を学習するなかで、幕府権力や将軍の力を盤石なものにするため、様々な取り組みがなされたことを「御威光」「武威」をキーワードに学習する。</p>	<p>■主体的に学習に取り組む態度</p> <p>■思考・判断・表現</p> <p>■知識・技能</p>

(3) 江戸図屏風の謎を読み解こう (1時間)

過程	時間	○学習活動・学習内容、【資料】	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	10分	○江戸図屏風に描かれているものを全て書き出そう。	□前時の学習内容を確認することで、既有知識の想起を行う。
展開	35分	○江戸図屏風は、徳川家光の業績を称えたものであることを確認する。 ○江戸図屏風を部分に分けて、「顔の見えない人物」「籠に乗っている人」を見つけよう。 ○朝鮮通信使が描かれている場所を見つけよう。 ○江戸幕府と通信使の関係を、御威光を手掛かりに考える。	□屏風が作成された意図を考えさせる。 □徳川家光と江戸幕府の権威を象徴する狙いがあったことを理解する。 □適宜、補助発問を行うことで、学習活動を円滑に進める。 ■知識・技能
まとめ	5分	○本時のまとめ ・江戸図屏風が描かれた背景や各種資料から読み取った情報についてまとめる。	□複数の視点にそってまとめるように支援する。

(4) 他の屏風から情報を読み取る (1時間)

過程	時数	○学習活用及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
事後学習	1	○他の博物館や博物館ホームページに記載されている資料を取り上げて、そこから情報を読み取る。 (新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、来館しての屏風鑑賞ではなく、ホームページに公開されている資料の鑑賞および読み解きを行った。)	■主体的に学習に取り組む態度 ■思考・判断・表現 ■知識・技能

4 実践の概要 (江戸図屏風を活用した授業)

ここでは、「江戸図屏風」を活用した時間を中心に、事前学習から事後学習までを整理・提示する。

(1) 事前学習 (1時間)

江戸図屏風からより多くの情報を読み取るためにも、まず長篠合戦図屏風を用いて屏風から情報を読み取る練習を行った(事前の聞き取り調査で、長篠合戦図屏風を知っている生徒が一定数いたため、本授業実践において取り上げた)。

まず、長篠合戦図屏風のデータを Google ドライブにて生徒に共有し、タブレット端末で屏風を確認できるようにした。加えて、各グループに拡大印刷した屏風の画像資料(A3サイズ)を配布した。生徒には、「見やすい方」「メモを取りやすい方」を使用するように指示を出した。なお、長篠合戦図屏風を使った授業実践は、佐藤正寿氏の実践⁹⁾を参考にし、『長篠合戦図屏風』は大坂城天守閣ミュージアムショップで販売されている『長篠合戦図屏風(大坂城天守閣蔵)』を使用した。

次に、「長篠合戦図屏風に描かれているものを全て書き出そう」と指示を行い、屏風を観察して、描かれているもの全てワークシートに書き出させた。生徒からは、「武将、足軽、山、城、馬防柵、川、刀、

旗、鉄砲、やり、馬」などの様々な解答があった。そのような生徒の解答に対して「どうして、全員同じ色・デザインの旗にしないんだろう」「雨が降ったら火縄銃は使えるのだろうか」といった素朴な疑問を取り上げ、やり取りをしながら授業の進行を行った。答えがわからない問いについては、全員でタブレットを使って調べ学習を行った。この段階で、①グループを作って協力しながら進めること、②屏風を読み解く際は、他の生徒と相談して進めて良いこと、③随時タブレットを使って調べ学習をすること、といった注意事項を伝えた。なお、本実践を通して、授業内容に関係する実物資料は可能な限り生徒たちに提示するように心掛けた。例えば、「長篠合戦図屏風」を読み解く学習では、火縄銃のレプリカや草鞋などの資料を提示した。

続いて、「一段と大きく描かれている人を探そう」と問いかけ、ひととき大きく描かれている人物を見つけるように指示を出した。全てのグループが発見したことを見計らって、「なぜ、大きく描かれているんだろう」と問いかけ、作成者や作成を依頼した人の思惑について考えさせた。その際、大きく描かれた人物の部隊だけが馬防柵の前で火縄銃を構えており、勇敢に戦っている姿に着目させた。加えて、「織田・徳川連合軍が勝利した理由・武田軍が敗北した理由を屏風から抜き出そう」という発問を行い、織田・徳川連合軍が優勢に見えるように描かれている点を考えさせた。生徒からは、「織田・徳川連合軍の方が、武将や足軽の数が多」「武田軍のもっている旗の多くが倒れている」「馬防柵前の武田軍の武将が倒れている」などの回答があった。このように、事前学習では屏風が作られた背景や思惑に着目した資料の読み解きを行う練習に時間を割いた。

(2) 江戸幕府や将軍の治世についての学習 (1時間)

まず、「関ヶ原の戦い」や「大坂の役」を経て、江戸幕府という安定した政権が成立したことを説明した。その後、初代将軍である徳川家康から3代将軍徳川家光までの治世について学習を行った。本時で学習した主な内容は表の通りである。幕府権力や将軍の力を盤石なものにするため、様々な政策が実行されたことについて「御威光」や「武威」をキーワードに学習した。

将軍名	政策など
徳川家康(初代)	<ul style="list-style-type: none"> ・1603年に征夷大将軍の宣下を受け、江戸に幕府を開く。 ・将軍職を秀忠に譲り、自身は大御所として実権を握る。
徳川秀忠(2代)	<ul style="list-style-type: none"> ・大坂の役を経て、豊臣方を攻め滅ぼす。 ・武家諸法度を制定して、大名を厳しく統制する。 ・外様大名(福島氏)を処分して、将軍の力を示す。
徳川家光(3代)	<ul style="list-style-type: none"> ・外様大名(加藤氏)を処分して、将軍の力を示す。 ・新たな武家諸法度を発布して、参勤交代を義務付けた。

(筆者作成)

(3) 江戸図屏風の謎を読み解け (1時間)



江戸図屏風 (A0サイズの複製) を広げるため、教室の机を後方に移動させて授業を実施した。まず、「江戸図屏風に描かれているものを20個書き出そう」と問い、屏風から情報を抜き出してもらった。生徒からは、「江戸城、富士山、船、雲、海、馬、井戸」などの回答があった。細かい部分については、タブレット上に江戸図屏風を表示し、拡大縮小しながら確認してもらった。

(出典) 国立歴史民俗博物館 HP「江戸図屏風」より一部抜粋

次に、「顔が見えない人・籠に乗っている人を探してみよう」と問い、屏風に描かれている徳川家光を複数見つけ出し、見つけたところに付箋を貼ってもらった。この作業から、江戸図屏風が徳川家光の業績・仕事をテーマに描かれていることを確認した。その際、江戸城が中心に大きく描かれている点に触れ、江戸幕府や将軍の権威を象徴していることについても説明した。

その後、「外国人の一团と思われるグループを見つけよう」と問い、江戸城に登城している朝鮮通信使についても紹介した。その際、通信使が江戸城を訪れた後、日光に向かっていることに触れ「なぜ、朝鮮通信使は日光に向かったのだろう」と問い、日光東照宮と江戸幕府の関係についても言及した。その際、徳川家康の肖像画を用いて、家康が神格化されたことについて説明を行い、「関八州の鎮守」として日光東照宮に祀られることで、江戸幕府の政治を安定させる装置として機能していくことにもふれた。

(4) 様々な屏風の謎を解き明かそう！（1時間）

事後学習では、「長篠合戦図屏風」および「江戸図屏風」の実践をふまえ、自分で選んだ資料を読み解く課題を提示した。授業を構想した当時は、事後学習として、地域の博物館に行き、様々な資料を読み解く実践を予定していた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、学外での実習が困難になったため、各館がホームページ上で公開している資料を対象に読み解きを行う課題を出した。生徒は、洛中洛外図屏風や豊臣秀吉の肖像画など、多様な資料の読み解きに挑戦していた。

(5) 発展的な学び（数か月間）

その後、授業実践を行った2年生のなかから、資料の読み解きに興味をもった生徒を集めて、探究学習を行った。この学習では、博物館図録などに掲載されている肖像画200点の収集を行い、肖像画に描かれた人物が身に付けている装身具に着目した分析・検討を行った。研究成果は、考古学研究会第68回総会・研究集会において開催されたポスターセッションにて発表を行った（2022年4月23日～同年5月31日まで開催）。加えて、『クラーク記念国際高等学校地域研究部報告書第1巻』（ISSN 2436-1232）を発刊し、装身具に着目した研究レポートの執筆・掲載を行った。

5 本研究の成果と課題

本研究の意義の第一に、五感で感じる学びを目指した点が挙げられる。“生徒観”で述べたように、芦屋校には、「見る力」「聞く力」が弱い生徒が一定数在籍している。そのため、通常の、板書と教員の説明だけで構成される授業では正しく内容を理解できない生徒も少なくない。よって、本実践では、歴博の協力を得つつ、様々な感覚器に訴えかける授業を模索した（授業内容は、先述した通りである）。

アンケート等による効果測定を行っていないため推測の域を出ないが、ワークシートの記述や授業中の発言からも、「見る力」「聞く力」だけを求められる授業実践と比較して、発言回数・発問への回答人数・ワークシートの記述など、どの場面を見ても普段の授業を上回っているように感じた。また、社会系科目に苦手意識をもっている生徒も、A0サイズに拡大された江戸図屏風やタブレット上に表示した高精細な江戸図屏風などに興味をもって取り組んでいる姿が見受けられた。

今回の実践を図示すると、下記のようなになる。なお、実際は、「視覚」「聴覚」「触覚」の3つの感覚器に訴えることにとどまったため、三感での学びと評した方が打倒かもしれない。コロナ禍で、実践できなかった部分は、今後の課題としたい。



(筆者作成)

第二に、「学校での学び」と「社会での学び」を切り離すのではなく、密接に結びつけようとした点が挙げられる。例えば、『指導要領—地理歴史編—』の日本史探究の「指導計画の作成と指導上の配慮事項」において、「歴史の学習を抽象的な概念の操作で終わらせずに一層の具体性をもって実体化していくことや、学校の授業のみで終わらせずに空間的には教室の外へ、時間的には卒業後まで継続させ、将来にわたって学び続ける機会や方法についての認識や姿勢を育み、生涯学習へと発展させていくことが大切である」¹⁰⁾と記載されている。ここからも、学校教育における歴史学習を生涯学習へと発展させることの重要性が読み取れる。本研究においても、屏風を読み解く際、作成者や作成を依頼した人が背景にいることを踏まえ、資料の読み解きを行った。その上で、博物館等のホームページで公開されている資料や肖像画、屏風などを事例に課題に取り組むなど、授業で得た知識・技能を働かせた発展的な学びに繋がるように留意した。コロナ禍という制約がなければ、最寄りの博物館に来館して資料の読み解きを行う予定であり、空間的にも教室の外での学習に繋げることを目的としていた。新型コロナウイルスの感染拡大が下火になった際、改めて実践を行いたい。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、国立歴史民俗博物館広報サービス室の学校対応の方々に助言・資料提供などをいただきました。また、博学連携研究会議のなかで、多くの先生方に助言・指導をいただきました。授業実践を行うにあたっては、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパスの河邊文宏氏（当時）、石川眞榔氏（当時）、井上翔太氏にお世話になりました。末筆ながらご協力いただきました全ての方に御礼申し上げます。

【註釈】

- 1) 『指導要領－地理歴史編－』 p.234 より引用。
- 2) 『図解 江戸図屏風をよむ』 p.6 を参照
- 3) 前掲書 p.7 を参照
- 4) 前掲書 p.7 を参照
- 5) 前掲書 p.7 を参照
- 6) 前掲書 p.4 より引用
- 7) 『特別展観 朝鮮通信使』 p.66 より引用
- 8) 前掲書 p.73 より引用
- 9) 佐藤正寿の授業実践「長篠の戦いを読み取ろう」(ミライシード実践ガイド) を参考に実践を行った。
- 10) 『指導要領－地理歴史編－』 p.266 より引用

【参考文献】

- ・ 一場郁夫 2014 「博学連携による博物館学習の推進－博物館と学校との実質的な連携による推進体制の構築について－」
『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第 18 号、日本ミュージアム・マネジメント学会、 pp.51-57
- ・ 小澤弘・丸山伸彦（編）1993 『図説 江戸図屏風をよむ』河出書房新社
- ・ 黒田日出男 2010 『江戸図屏風の謎を解く』角川学芸出版
- ・ 黒田日出男 2014 『江戸名所図屏風を読む』角川学芸出版
- ・ 仲尾宏 2007 『朝鮮通信使－江戸日本の誠信外交』岩波書店
- ・ 奈良勝司 2018 『明治維新をとらえ直す－非「国民」的アプローチから再考する変革の姿』有志舎
- ・ 八田友和 2020 「肖像画の変遷に着目した教材開発研究」『日本教材学会第 32 回研究発表大会研究発表要旨集』 pp.168-171、日本教材学会
- ・ 八田友和 2022 「教科における生徒の個性に応じた支援－非来館型の博物館活用を事例に－」『リカレント研究論集(2)』 pp.60-61、八洲学園大学リカレント研究センター
- ・ 三鬼清一郎 2019 『大御所 徳川家康』中央公論新社
- ・ 水藤真・加藤貴（編）2000 『江戸図屏風を読む』東京堂出版
- ・ 渡部竜也 2019 『主権者教育論－学校カリキュラム・学力・教師』春風社
- ・ クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス地域研究部 2022 『クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス地域研究部報告書』第 1 巻
- ・ 群馬県立歴史博物館（編）『洛中洛外図屏風に描かれた世界』三館共同企画展『洛中洛外図屏風に描かれた世界』プロジェクトチーム
- ・ 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説－地理歴史編－』東洋館出版社
- ・ 佐藤正寿（監）「長篠の戦いを読み取ろう」（Benesse ミライシード実践ガイド）（最終確認 2023 年 1 月 29 日）
<http://www.magokoro.ed.jp/manage/contents/upload/5caae520855.pdf>
- ・ 国立歴史民俗博物館ホームページ「WEB ギャラリー」（最終確認 2023 年 1 月 29 日）
https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/index.html